5　牛の皮膚（毛包虫による肉芽腫性炎）

豊橋市食肉衛生検査所　　○山口貴宏
（全食協病理部会第50回研修会・演題番号1893）

動物名：牛　　品種：交雑種　　性別：去勢　　年齢：27ヵ月

病歴：不明

肉眼所見：全身の皮膚、特に胸部から腹部を中心に粟粒大～小豆大の丘疹が散在していた。
丘疹は一部、疎毛状態であったが脱毛や発赤は認められなかった。
丘疹の割面は硬結し、やや橙色を呈していた。中心部は乳白色を呈し粘調性であった。

組織所見：丘疹は真皮から皮下組織にかけて結合織に囲まれた肉芽組織を呈し、中央に虫体が認められた。虫体を取り囲む様に好酸球、マクロファージ、異物巨細胞が混在し、一部には壊死がみられた。その周囲にはリンパ球や形質細胞が認められ、最外部は結合織によって囲まれていた。
なお、肉芽組織以外の毛包部や皮脂線には虫体は認められなかった。
丘疹部を20%KOH処理した圧迫標本から毛包虫成虫が検出された。

組織診断名：毛包虫による好酸球性肉芽腫

診断名：牛の毛包虫症

まとめ：と畜搬入牛において、一部に限局している毛包虫症はよく見られるが当該牛のように全身性のものは少ない。毛包虫は皮膚に常在しており、また敷具その他を通じて間接的に感染することは考えられないのでこの症例はなんらかの原因により皮膚免疫が低下し、全身性に発展していったと考えられる。